

弁護できないヒロシマ修正主義が、今日までアメリカを支配している（後半）

【訳者注】これによって、ヒロシマとナガサキで終わった日米戦争が、今日まで続いていることがわかるだろう。トルーマン大統領の超人間的「悪」も、（原爆が使えないだけで）現在の中東破壊に引き継がれている。（先日、翻訳紹介したモスルの破壊の様子を知るだけでもわかるだろう。原爆破壊とほとんど変わらない。）我々は——少なくとも私は——ほんの数年前まで、人類は、ナチスの残虐や日本の原爆から「学習」することによって、道徳的に進歩したに違いないと思っていた。したがって、ある国家または国家同盟が「純粹悪」を体現するなどということは考えられなかった。しかし現実世界の本当の姿が今わかってきた。

トルーマンは、あのフリーメーソンの制服姿で今も生きている。そして、米国民もその多数が、ここにあげられている統計的数字が本当なら、トルーマンは偉大な大統領だと思っている。これは、彼らが官民ともに信じ教育している「アメリカ例外主義」という、戦争正当化のための、幻影の優越感からきている。我々はそういう国家と同盟を結んでいることを忘れてならない。

最も偉大な世代に対する我々の“不屈の”信仰

その後 20 年以上になるが、我々は、歴史上唯一の核攻撃だったものの、誠実な、公的な吟味へと、一步でも近づいたこともなければ、Studs Terkel が名付けて有名な“善なる戦争”を、我々がどのように仕掛けたのかを、集団的に反省したこともない。彼はこの言葉を、第二次大戦についての 1984 年の、古典的な、歴史口述のタイトルとして用い、この引用符はわざと付けたもので、それは、推定 6 千万の人々が死んだ戦争を、そのように考えることへの皮肉を込めたものだった。その後、年月を経て、この言葉はアメリカ人の常套語になったが、この引用符は取れてなくなり、それと同時に、この年月間の我々の行動や動機に、わずかの疑いをもつこともなくなった。

確かに、核戦争を始めるということになると（67 の日本の都市を破壊し、長崎原爆以後も 5 日間続けられた焼夷弾ではなく）、アメリカにも、もっと批判的に考える者のいる証拠はある。例えば最近の世論調査では、日本に対して核兵器を使ったのは正しかったと考える者は、現在、1990 年代から数ポイント下がって、**たった 56%**しかいない。一方、30 歳以下

のアメリカ人では、支持する者がついに 50%を割った。ついでに覚えておくべきことは、第二次大戦直後には、85%のアメリカ人がこの爆撃を支持したことである。

<http://www.ditext.com/japan/napalm.html>

<http://www.pewglobal.org/2015/04/07/americans-japanese-mutual-respect-70-years-after-the-end-of-wwii/>

もちろん、このような爆撃支持の態度は、1945年には驚くことではなかった——特に、戦争が勝利に終わったことに対する安堵と喜び、それに当時の反日感情を考えれば。それより遙かに驚くべきことは、1946年になると、何百万というアメリカ人が、John Hersey のベストセラー *Hiroshima* に夢中になったことだろう。これはグラウンド・ゼロからの感動的なレポートで、6人の日本人の生き残りの経験を通じて、原爆の恐ろしさを探ったものだった。それは、次のような心を掴む文章で始まっている——

「1945年8月6日、日本時間のきっかり午前8時15分過ぎ、広島上空で原子爆弾が閃光を放ったその瞬間、東アジア・ブリキ製品会社の人事課に勤めていたミス・トシコ・ササキは、工場事務所の彼女の席に座ったところだった。そして隣のデスクの若い女性と話そうと首を向けようとした。」

『ヒロシマ』は、その爆弾による破壊の物怖じしない描写と、アメリカのかつての敵を、威厳と人間性をもって扱ったことによって、注目すべき記録文書でありつづけている。「問題の核心は」とハーシーは結論している、「その今の形の戦争全体が、たとえそれが正当な目的のためであったとしても、正当化できるかということである。たとえ、目先にどんな良いことがあると、それをはるかに超える巨大な、物質的かつ精神的な悪を、それは結果として、もたらすのではないだろうか？」

ABC ラジオ・ネットワークは、ハーシーの本を非常に重要と考えて、4人の俳優にその全体を朗読させ、放送すると、さらに読者の範囲は広がった。今日、ある大きなアメリカのメディア会社が、21世紀の我々の戦争の犠牲者への同情を生み出した、ある作品に、長い放送時間を捧げるといようなことが、考えられるだろうか？ あるいは、第二次大戦への我々の参戦によって起こった“物質的かつ精神的な悪”を考えさせる、最近の評判の本といったものを、考えることができるだろうか？ 私はできない。

実は、あの戦争後の最初の数年間に、ポール・ボイヤーが、その優れた本 *By the Bomb's Early Light* (爆弾の最初の光によって) で示したように、核兵器の存在そのものが、新しい弱点をこの国にもたらすかもしれないという恐怖が起こり、アメリカの勝利気分は次第に消えていった。結局、いつか別の強国、たぶんソ連が、その創造者に対して新しい形の戦

争を用い、贖罪とも慈悲とも絶対に見ることのできない、アメリカの終末をもたらすかもしれない。<http://www.amazon.com/dp/0807844802/ref=nosim/?tag=tomdispatch-20>

しかし、ポスト冷戦の数十年間に、その恐怖は再び消えていった。（これは理屈の通らないことだ。なぜならパキスタンとインドという、南アジアでの核戦争でさえ、全惑星を“核の冬”の中に投げ込むと思われるからである。）それに代わって、“冷戦”というものが再び、疑いもなく正当なものとして考えられるようになった。例えば、第二次大戦について書かれ、ヒットした最近の本、Laura Hillenbrand の *Unbroken: A World War II Story of Survival, Resilience, and Redemption* (不屈の男) を考えてみよう。それは 2010 年に出版されて、NY タイムズのベストセラー・リストにほとんど 4 年間とどまり、ミリオンセラーになったものである。*Unbroken* のハリウッド版は 3 年前のクリスマスに発表された。

ヒレンブランドの本は、第二次大戦や、太平洋戦争についてさえ、その歴史を包括するようなものではない。それは、ルイ・ザンペリーニという（実在の）不良少年が、オリンピック走者になり、さらに B-24 の爆撃手になった物語である。1943 年、彼の乗った飛行機は太平洋上に撃墜された。彼とパイロットは、47 日間、餓死と戦い、サメの攻撃、日本軍機による機銃掃射にもかかわらず、救命筏で生き延びた。ついに日本軍の捕虜となり、非情な、サディスティックな殴打を受けながら、捕虜収容所生活を耐え抜いた。

これは確かに、読ませる本ではあるが、たった一人のアメリカ兵の受ける罰の苦しみや驚くべき回復力に、あまりに集中するために、月並みな国家主義的な勝利への衝動や自己への熱中を脱することができず、太平洋でのアメリカ兵の戦闘を劇的なものにした、あの人種憎悪といったもの以外には、ほとんど考えさせるものをもたない。これが少なくとも、『不屈の男』がアマゾンで受けた 2 万 5,000 のブックレビューのいくつかを読んでみて、受けた印象である。「第二次大戦の退役軍人に対する、私の尊敬の念は大いに高められた」と、ある典型的なレビューアーは書いている。また別の評者は、「戦争をする我々の兵士を愛してくれた、ローラ・ヒレンブランドに感謝する」と言った。「祖国に奉仕する勇敢な兵士たちの、これほど非人間的な扱いを読むのは、つらいことだ。」等々。

『不屈の男』は、1 頁半を、広島原子爆弾に当てているが、そのすべては、エノーラ・ゲイの米人乗組員の、高みの見物的な視点からのものである。ヒレンブランドは、これら乗組員の安全について心配している——「誰も、爆撃機がどれくらい離れば、やがて起こることから逃れることができるか、確実に知っている者はいなかった。」彼女は衝撃波の影響を描写しているが、それは地上のものでなく、彼らが、エノーラ・ゲイに兵士を押し込み、“空中へ投げ飛ばした” ときの、3 万フィート離れた所のことである。

映画化された *Unbroken* では、日本人の原爆体験に対する感情移入が、もっと少なくなっている。これは昨年春の私の大学院セミナーで、ある学生が話したことを思い出させる。彼は高校で社会科を教えているのだが、彼が同僚と、広島について我々がやっている読書の話をしたとき、彼らのうち3人が、次のような趣旨の意見を述べたという——「実は自分は、日本に対して原爆を使ったのは悪いことだとずっと思っていたが、映画〈不屈の男〉を見て以来、それは必要だったのだと思い始めた。」すなわち我々は、70年前にトルーマンが、あのスピーチで最初に開拓した領域に、いまだに住んでいるということである。

この映画の最後に、注意書きがスクリーン上に現れる——「信仰という動機から、ルイ（ザンペリーニ）は、積極的に前へ進む方法は、復讐でなく、許しであることを知ることになった。彼は日本に戻り、昔、彼を捕虜にしていた人々を見つけ出し、和解した。」

これは実に感動的である。収容所の守衛たちの多くは、そうすべきであるように、謝罪した。そして、おそらくもっと驚くべきことに、ザンペリーニは彼らを許した。しかし、アメリカ側にも謝罪の必要があるかもしれないとは、どこにも言われていない。我々の無差別な日本破壊のことは、全く触れていない。2つの都市の原子爆弾による破壊という言い方をされるが、これは、リーハイ提督が言ったように、「知られた戦争法規のすべて」を踏みにじるものと言うべきである。

今、その出来事から70年以上を経て、我々はここにいる。しかし、日本の市民の密集地に核攻撃を行ったことは、慈悲の行為であったという考えから、一般のアメリカ人が遠ざかったとはどうも思えない。もしかしたら、ある未来の米大統領が、ついに我々の核攻撃の謝罪をする、ということがあるかもしれない。しかし一つのことは確かなようだ——それを聞く原爆の犠牲者はそのとき、一人も残っていないだろう。

（クリスチャン・アピーは、TomDispatch のレギュラー投稿者、マサチューセッツ大学の歴史学教授。ベトナム戦争についての3冊の著書があり、最新のは *American Reckoning: The Vietnam War and Our Natural Identity* (Viking)）